

聖書の集い（第8回）

2015年1月14日

古本 靖久

1、聖歌 374番 「心の扉をひらくと」

2、お祈り

3、聖書 「テサロニケの信徒への手紙一 5章16節～22節」（新約聖書379ページ）

4、今日の内容

「感謝の心があると幸せ」

今回の内容は、「感謝」についてです。わたしたちは生活の中で、「ありがとう」と言われると、とても気持ちの良いものです。でも相手に何かしてあげた時、「ありがとう」の言葉がないと、何だかさびしいものです。

わたしたちは、たくさんの人の間で生きています。その中で心から「ありがとう」と言いあえる関係ができることがとても大切です。子どもたちにも、自分から「ありがとう」と言ってほしいものです。

ところが、なかなか「ありがとう」という言葉が出てこないことがあります。恥ずかしいというのもあるでしょう。他にも原因があるようです。今日はそのお話をしていきたいと思います。

① 人間の「妬^{ねた}み」という感情

ある人は、人間の感情の中で「妬み」ほど醜いものはない、と言います。先日、わたしは家族でボウリングに行きました。ほぼ20年ぶりのことです。わたしが20代の頃は遊ぶと言えばボウリングかビリヤードだったので、そこそこ上手だったのですが、久しぶりに行って、驚きました。あまりの衰えに。隣の若者がとてもうらやましく思えたのです。

わたしたちはいつも、何でも思い通りに与えられたいと考えています。そしてそれがかなわなかった時、しかも周りに「与えられている人」がいた時、妬むのです。お金、家、地位、才能、すべてのものに満足できずに、つい周りと比較してしまう。その感情を、子どもたちも持ち始めます。「あの子は買ってもらったのに」、「みんなやってるんだよ」、「これは飽きた、他のが欲しい」。このような言葉の裏には、妬みがあるのです。

② 与えることと、制限すること

わたしたちは、自分が望むものや他の人が持っているものは、何でも手に入るといいのに、と思っています。赤ん坊の時は、それでいいでしょう。親も精一杯、その要求をかなえようとしします。しかし、次第に手に入らないものも出てきます。まだ持つには早すぎる、親として与えたくない、子どもに持たせるには高価すぎる。スマホ、ゲーム機、漫画、パソコン…。

欲しいものが手に入る時もあれば、そうでない時もある。子どもは、「優しいママ」と「厳しいママ」が存在するように思えるかもしれません。しかし次第に子どもは、その二人のママが同一人物であり、欲しいものはすべて与えられるわけではないことを知ります。時には満足し、また時には不満な気持ちになることを学ぶのです。

このことを子どもに気づいてもらうために、大切なことがあります。第一に、「優しいパパ」と「厳しいママ」（あるいはその逆）のように、役割分担をしてしまわないことです。子どものことをいつも大切に考えて、子どもたちに時に優しく、時に厳しく接するようにしたいものです。

そして、すべてを我慢させるのではなく、一方では子どもに十分な満足感を与えることも必要です。満足したことのない子どもは、つねに欠乏しているので、感謝の心を持つことができません。まずたっぷりの愛を子どもたちに惜しみなく与えましょう。

余談ですが「乳離れ」という言葉があります。この言葉、聖書が書かれた「ヘブライ語」という言語では、「たっぷりと与えられた」という意味があるそうです。つまり子どもが乳離れするためには、たっぷりと与えられる必要があるのです。あなたは何を子どもたちに与えてあげますか。

③ 「ありがとう」が心から言える子に

子どもたちはどうして「ありがとう」って言うのでしょうか。考えてみましょう。

- ・ありがとうって言わないと、親がうるさいから。
- ・ありがとうって言うと、また何かもらえそうだから。
- ・ありがとうって言うと、何だか気持ちいいから。
- ・家でお父さんやお母さんも、いつもありがとうって言っているから。
- ・何かしてもらうことは、当たり前ではないから。

どれもあると思います。また、こうなりなさいと、強要すべきことでもないでしょう。しかし子どもたちが、心から「ありがとう」と言える人になって欲しいと思います。